



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	全部床義歯の人工歯材料が口腔関連QOLに与える影響の検討：非盲検ランダム化比較試験 [全文の要約]
Author(s)	古玉, 明日香
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(歯学)
Dissertation Number	甲第14996号
Issue Date	2022-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/85191
Type	doctoral thesis
File Information	Asuka_Kodama_summary.pdf



学位論文内容の要約

学位論文題目

全部床義歯の人工歯材料が口腔関連 QOL に与える影響の検討
：非盲検ランダム化比較試験

博士の専攻分野名称 博士（歯学） 氏名 古玉 明日香

全部床義歯における既製の人工歯として、レジン歯、硬質レジン歯および陶歯が用いられている。レジン歯は咬耗しやすいことから、強度を向上させるためにフィラーを含有したコンポジットレジンを用いた硬質レジン歯が開発され、耐摩耗性と審美性、さらには咬合調整などの臨床的な操作性が改善された。

一方で、陶歯は、耐摩耗性に加えて、光沢や透明感に優れ審美的であり、プラークが付着しにくく衛生的なことから、その有効性は高いと考えられるが、調整や排列のしやすさなどから、現在は硬質レジン歯が最も多く使用されている。しかし、人工歯材料について臨床効果を比較検討した報告はない。

本研究の目的は、全部床義歯の人工歯材料の違いが無歯顎患者の咀嚼機能と患者の満足度および口腔関連QOLに与える影響について比較・検討することである。

対象者は、北海道大学病院義歯補綴科に通院中で、上下顎全部床義歯の新製が必要な患者とした。

本研究では、硬質レジン歯としてベラシアSA（株式会社松風、京都）を、陶歯としてベラシアSAポーセレン（株式会社松風、京都）を選択し、患者をランダムに割付けた。義歯製作と装着後の調整は、評価者とは別の担当医が行った。

評価項目は、口腔関連QOL（Japanese version Oral Health Impact Profile for assessing edentulous subjects: OHIP-EDENT-J）、満足度（Visual Analog Scale: VAS）および咀嚼能率（グミゼリーを用いた溶出法）とした。

各評価項目の測定は、新義歯製作前（以下、BL）、新製した義歯装着後3か月（以下、3M）、義歯装着後6か月（以下、6M）および義歯装着後12か月（以下、12M）に行った。

本研究の主要評価項目は、3MでのOHIP-EDENT-Jとした。

統計解析は、主要評価項目をOHIP-EDENT-Jスコアとし、陶歯と硬質レジン歯の3Mでの結果をWilcoxonの順位和検定にて比較した。各評価項目のBL、3M、6M、12Mの結果について陶歯と硬質レジン歯の比較をWilcoxonの順位和検定を用いて行った。また、陶歯および硬質レジン歯それぞれについて、各時点間の比較を行った。統計解析は、Wilcoxon符号付順位検定を用いた。

その結果として、主要評価項目である3Mにおける陶歯と硬質レジン歯のOHIP-EDENT-Jスコアに、有意差は認められなかった（ $p=0.097$ ）。また、VASを用いた総合的な満足度の6Mで有意差（ $p=0.040$ ）を認めたが、他の各評価項目の各時点においては、有意差は認められなかった。また、硬質レジン歯のOHIP-EDENT-Jについて、BLと3M（ $p=0.005$ ）、BLと6M（ $p=0.039$ ）の間に、OHIP-49のBLと3M（ $p=0.008$ ）、OHIPのサブドメインであるPsychosocial impact（ $p=0.006$ ）、Oral-function（ $p=0.010$ ）、Oral-facial Appearance（ $p=0.002$ ）のBLと3M、またBLと6MのOral-function（ $p=0.047$ ）、Oral-facial Appearance（ $p=0.018$ ）の間で有意差を認めた。VASを用いた満足度の総合評価（ $p=0.011$ ）と審美（ $p=0.035$ ）、発音のBLと3M（ $p=0.018$ ）で有意差を認めた。陶歯はVASを用いた満足度の総合評価のBLと3M（ $p=0.042$ ）、また審美のBLと3M（ $p=0.036$ ）、BLと6M（ $p=0.012$ ）、咀嚼のBLと3M（ $p=0.022$ ）、安定のBLと3M（ $p=0.020$ ）の間で有意差を認めた。

本研究は、人工歯材料についてランダム化し、さらに硬質レジン歯と陶歯の形態が同一の製品を使用していることから、各群の違いは人工歯の材質のみであると考えられる。

本研究の結果から、硬質レジン歯を使用した全部床義歯の装着により、口腔関連QOLは改善するが、陶歯では、明確な改善を認めることができなかった。よって、装着3か月という短期においては、硬質レジン歯を使用した義歯による口腔関連QOLの改善効果は陶歯より高い可能性が示された。これは硬質レジン歯の調整のしやすさや初期の摩耗などによる可能性が考えられる。しかし、装着3か月時点における比較では陶歯と硬質レジン歯の間に臨床的に意義のある差は認められなかった。今後、さらに症例数を集積し、解析を行う必要があると考えている。

また、審美性については、陶歯、硬質レジン歯ともに義歯の装着で改善する傾向が示されているが、材料特性上、より長期における評価を実施する必要があると考えている。

以上から、義歯装着後3か月時点での口腔関連QOLについては、人工歯材質の違いによる臨床的に意義のある差はない可能性が示された。

また、総合的な満足度および審美性に関する満足度は、人工歯材料の種類によらず、全部床義歯の装着により改善することが示された。